

Special Essay

科学の専門化と統合化

分子生命遺伝情報

諸井 将明

科学雑誌に載る科学論文の数は毎年確実に増大している。これは世界中の科学者の数が増加していることと、科学が多くの分野で発展していることの証拠であり大いに喜ばしいことである。しかし、このような論文の氾濫による問題も出てきている。

30年以上前、私が大学院生のころでは関係する論文を全て読むことも可能であった。私も図書館でケミカルアブストラクトを調べ、関連論文を全て読もうとはしたが、なかなか全部は読みきれなかった。その後コピーが自由に取れるようになったが論文数も増え、油断をすると未読の論文のコピーが机の上に積み上がるようになる。論文を効率よく探し、効率よく読むことが重要になってきたのである。関連する論文のリストを送ってくれるサービスがあり20年位前からこれを利用していたが、これも数年前に提供されなくなった。その理由はインターネットの普及であり、関連する論文を個人が瞬時に検索することが可能になったのである。膨大な数の論文が発表されている現代では自分の研究に関連した論文を検索するにはコンピュータが必要であり、学術雑誌の電子化が急速に進んできた一因でもあろう。

このような状況だと論文をじっくり読むことが難しくなり、自分に関連のない論文を読むことは事実上できなくなる。時間があつたとしても基礎知識や問題点の認識が弱く、論文を十分には理解できないであろう。他の分野の発展や発見を知るにはエキスパートによる解説が必要となってくるが、このような解説にはなかなかお目にかかれない。良い解説を載せた総合誌が出てくればと思っているが、そうすると論文の氾濫がさらに増えることになってしまう。一方、科学の発展や発見を題材にした単行本がある。科学者や啓蒙家によって書かれた本は昔からあつたが、最近では「太りゆく人類 肥満遺伝子と過食社会」「スノーボールアース」などジャーナリストによって書かれたこの手の本が出てきている。関係者を取材し、登場人物の人物像も描き、またドラマ仕立てでもあるため読んで面白くひきつけられてしまう。科学者が書くと科学的真実に縛られて固いものとなってしまうのであろう。このように専門化が進むと総合化が必要となり、さらにその中から一般化した作品が出てくるといふことだろうか。理系離れが叫ばれているが、科学は面白いものであり、膨大なデータの中から興味あるドラマを作ってくれる作者がより多く出てきてくれることを願っている。またこういった本も図書館に並べておいてほしいものである。